私を追放したことを後悔してもらおう❷

～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～

ヒツキノドカ
Nodoka Hitsuki

Regina BUNKO

登場人物紹介



エリカ

莫大な資産を持つ大商会
『スカーレル商会』の娘。
アリシアの友人でよき理解者。

トマス

プロミアス領の領主でアリシアの父。
短気で保守的な価値観を持っている。
アリシアを勘当するが……

オルグ

史上最年少で
Sランクになった冒険者で、
『赤の大鷲』のメンバー。
アリシアに想いを寄せている。

レン

『スカーレル商会』の調合師。
不愛想だが、心配性な一面も。

ブリジット

シアン領の領主の娘で、
次期領主。風魔術が得意。

ルーク

アリシアの護衛で剣術の達人。
飄々としていて、謎が多い。
実はアリシアと似た境遇。

アリシア

ポーション研究好きの元令嬢。
父に領地を追放されたが、
最高レベルの調合スキルで
薬師として活躍中。

ランド

亀の精霊。
アリシアに助けられ、
以降行動を共にしている。
伸縮自在。

目次

私を追放したことを後悔してもらおう2
～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～ 7

書き下ろし番外編
精霊ランドの後継者 349

私を追放したことを後悔してもらおう2

～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～

プロローグ

「……」

私は無言のまま、広くもない部屋の中をうろついていた。

落ち着かない。こういうときはポーションの調合をして気を紛らわせるけれど、今日ばかりはそれもできない。普段なら絶対にしないようなミスをしそうだからだ。

「ねえランド、どうしようか。俺の雇い主様が見世物小屋の珍獣みたいになってるんだけど」

「……まあ、無理もなかろうな。予定では今日完成すると言っておったし」

部屋の隅で金髪の美青年ルークと亀の精霊ランドがひそひそと話しているけれど、それに突っ込む余裕もない。

ここはトリッドの街にある宿屋、「長耳兎亭（ながみみうさぎてい）」の一室だ。

この街に来たばかりの頃に利用していた宿屋である。諸事情により、私は一時的に拠点をこちらに移している。

そしてその諸事情というのが――

「あー、こちら、アリシア様のお部屋でよろしかったですかい？」

来た！

ノックとともに聞こえた言葉に私は素早く反応し、部屋の扉を開ける。

そこに立っているのはいかにも大工です、という頑強な薄着の男性である。彼こそが私の待ち人だ。

「で、できましたか？」

私が聞くと、彼はにやりと笑った。

「ええ、つい先ほど。屋敷の改装工事、ばっちり完了いたしやした。――ポーションをお売りになるっていう、店舗のほうも含めて」

「おおおお……！」

私は目の前の光景に思わず歓声を上げる。

私は半月ほど前、「戦斧（せんぷ）のガロス」と呼ばれる盗賊の一味に誘拐された。この街の薬

師ギルド長でもあるアーロン工房の工房長が、彼らに依頼して私を街から排除しようとしたのだ。私は監禁された場所で出会ったルークと協力し、どうにか生還。工房長はこれまでの悪事が明るみになり、ガロスの一味もろとも投獄されることとなった。

護衛としてルークを雇って身の安全を確保した私は、前々から温めていた計画を一段階先に進めることにした。それがぼろぼろだった屋敷の改築である。

「ついに、ついに私の店が……！」

そこにあるのは、同じ場所とは思えないほどに変貌した屋敷の姿だった。

荒れ放題だった庭はきちんと整備され、屋敷に絡まるツタはすべて撤去。割れた窓やら建物のヒビやらも修繕され、貴族の館といっていいくらいの立派な外観になっている。

しかしなにより目を引くのは、庭に新たに作られた建物だろう。

明るい色の木材で作られたそれは、可愛らしい看板とテラス席でも用意すれば、若者向けの喫茶店として通用しそうだ。しかし中に並べるのは私が作る各種ポーションである。

そう――これは私がこれから開くポーション店なのだ。

街の大工ギルドに依頼して屋敷を改修、増築してもらっており、その完成が今日だった。依頼内容は「屋敷の修繕」、「庭にポーション店として使える建物を作る」、という二つ。

私がそわそわしていた理由である。

「さあさあ中を確認してくだせえ、お客様。ご要望はきちんとすべて守ってあります」

「はい！」

棟梁（とうりょう）の声に従い、意気揚々と敷地に足を踏み入れる。

まずは店となる建物の中。

ここにはポーションを置く棚と、会計用のカウンター、裏にはポーションを置いておく倉庫がある。

倉庫はあまり広くないけれど問題ない。もっと大きな保管場所は屋敷の中にある。

「木材のいい匂いがするね。落ち着くなあ」

「清潔感があるのもいいのう」

ルークとランドが口々に言う。

まだ装飾もなにもないけれど、そこまで派手にする必要はないだろう。

ものが少ないと清潔に見える。ポーション店ならそういう印象もいいほうに働くはず

だ。……観葉植物くらいは置いたほうがいいかもしれないけれど。

ある程度確認したのち、庭を突っ切って今度は屋敷の中へ。

まず目に飛び込んでくるのは広々とした玄関ホールだ。天井が吹き抜けになっているため、視線を上げると瀟洒なデザインの二階の手すりが見える。左に応接室、右に食堂へと続く扉があるのを確認しながら前に進むと、突き当たりには大きな木製の扉がある。それを通り抜けると、奥には物々しい鉄扉がさらに待っている。

「ご注文通りゴツい扉をつけやしたが……本当にこれでよかったんで？」

確認する棟梁の言葉に頷く。

「ええ。調合師にとってポーションの調合レシピは特に大切なものですからね。工房の扉はどれだけ頑丈にしても足りないくらいです」

そう、屋敷一階の奥はポーション工房である。

ポーションの作り方は調合師によって微妙に違い、その差が個性になったりする。

ゆえに、調合レシピが外部に漏れないよう厳重に工房を管理するのが調合師の鉄則である。

……と、スカーレル商会のポーション工房を管理しているエリカが以前言っていた。

「お客様がそう言うなら構いやせんが。あ、開けるときはこの真ん中の石に手をかざしてくだせえ。みなさんの『魔力紋』に反応して開くようにしてありますんで」

魔力紋。

生物というのは大なり小なり魔力を持つものだけれど、指紋と同じく個人ごとにパターンが違う。それを識別して鍵代わりにする魔道具がこの扉には備わっている。

魔力紋は複数登録することができ、すでに私だけでなくランドとルークもこの扉を開けられる。精霊であるランドの体にもきちんと魔力は流れているため問題ない。また、魔力紋の追加登録、抹消も簡単に行うことができる。

鉄扉に手をかざし、ゴゴゴゴ……という地響きのような音がやむのを待ってから奥へ。

「おおーっ」

中はまさしくポーション工房だった。

個人の工房と考えればかなり広い。まだなにも置いていないから、余計にそう見えるんだろう。

ああ、早く素材や器具を持ち込んで、自分好みに改造したい！

「魔力式の粉砕機はあっち、攪拌機は……」

「はいはい、嬉しいのはわかったから次に行くよアリシア、棟梁さんが困ってるからねー」

ルークに引きずられて今度は工房左手の扉に向かう。
扉の先にあるのは貯蔵庫だ。ここには完成品のポーションだけでなく、素材も置く予定である。
そしてこの貯蔵庫には、とある設備が存在する。
「こ、これが魔力式自動昇降機ですか」
「ええ。魔力を注ぐだけで、簡単に上下数メートルを移動できるってシロモノです」
貯蔵庫は床の一部の色が違う。そこに乗って棟梁が魔力を込めると、色の違う床が真下に動いた。落下しているのではなく、あくまでゆっくりとだ。
そうしてやってきたのは地下の畑である。
私はポーション店の出店許可証の発行を申請したとき、例のアーロン工房の工房長から大量の『解毒ポーションV』を作るよう指示された。工房長の根回しによって、素材である「すずらん草」を買い占められた私は、成長促進ポーションを用いてここですずらん草を大量に育てて対処した。とはいえ屋敷の改装中は地下で畑の世話をすることもできないからと、それらは事前にすべて刈り取ってしまったので、今はなにも植えられていない。
足元の昇降機を見下ろして、棟梁が説明を続ける。

「この昇降機はかなり重いものも運べるので、素材なんかを移動させるのには重宝するでしょうね」
「うむ。いちいち大量の素材を持って階段を上がるのは大変じゃからのう……」
棟梁の言葉にランドがしみじみと同意する。
昇降機によって、この地下畑は一階の貯蔵庫とつながっている。ここで収穫したポーションの材料を、昇降機で上まで運ぶわけだ。手に抱えて移動するよりはるかに効率的である。
棟梁がふとこんなことを言った。
「しかしお客様、よくこんなもん注文できやしたね。昇降機ってのは確かに便利ですが、つけるのには莫大な金がかかりやすから」
「あー……その、まあ、出資してくれる方がいましたので」
「ずいぶん目をかけられてるんですなあ」
「……目をかけられているというか、迷惑をかけられた謝罪の証というか」
「？」
棟梁はよくわからないというように目を瞬かせた。
今回の改築はかなり高くついた。それを可能にしたのは、以前この屋敷で見つけた宝

石類を売って得たお金と、アーロン工房からの賠償金だ。アーロン工房は現在、衛兵に捕まった元工房長に代わってその補佐役だったベンさんが長を務めている。ベンさんはかつての上司がしたことを謝罪したのち、償いとして私の開業のために多額の出資を申し出てくれた。

私はそれを受け、結果として、この昇降機なんかの高額設備が用意できたのである。

……なんて事情は言いづらいので、ここは適当に濁しておきましょう。うん。

さて、地下畑を一周し、昇降機で一階に戻る。

そのまま一階の厨房や食堂、応接室、二階の生活空間などをチェックしていく。

問題点は特になし。いい仕事だ。

「では、自分はこれで。またなにかあれば遠慮なく呼んでくだせえ」

「はい。ありがとうございます」

屋敷を出たところで、棟梁は挨拶をして去っていった。

「……で、アリシア。これからどうするんじゃ？」

ランドの問いかけに私はこう宣言した。

「もちろん開店に向けて準備です！」

第一章

さて、開店準備と一口に言っても、やることは山ほどある。

商品決め、値段設定、調合道具や機材の用意、素材の調達ルートの確保などなど。

一番初めにすることは商品決めだ。

狙う客層は、まず冒険者。

というわけで、手始めにオルグたち「赤の大鷲」に聞いてみることにした。腕利き冒険者である彼らは冒険者の需要をよく知っているはず。

「まあ、魔物除けやヒールポーション、それに解毒ポーションがいいんじゃないか？」

オルグがそんなことを言う。

「ふむふむ。冒険者ギルドで売っているものと同じですね」

「あー、あとは虫除けがあればいいとはいつも思うな」

「虫除け？　虫型の魔物ではなく？」

「ああ。フォレス大森林には毒を持ってるようなタチの悪い虫が結構いるからな。野営のときなんかは特に気を遣うんだ」

「なるほど……それは盲点でした」

虫への対策は考えていなかった。この街の冒険者はほとんどがフォレス大森林で活動しているので、同じ悩みを抱えている人も多いだろう。他にもオルグの仲間が「女冒険者は体を清めるポーションが欲しいってよくぼやいてるぞ」と情報をくれた。これも参考になる。

オルグたちの他に「長耳兎亭」の女将などにも取材を行い、生活に役立つポーションにいくつか目星をつけておいた。

せっかく店を開くのだから、冒険者だけでなく街の人に需要があるものを作るのもいいだろう。

ポーションは薬師ギルドによって大まかな値段が決められているので、値段設定は問題なし。

機材の調達もそこまで苦労しなかった。前の屋敷の持ち主も調合師だったようで、古い機材がいくつか残っているのだ。これらは修理すれば問題なく使うことができた。

問題は素材の調達ルートだ。

さすがに地下畑だけで全種類の素材を用意するのは無理がある。

冒険者に依頼してもいいけれど、それだと安定した供給は望めない。冒険者が依頼を受けてくれるかどうか読めないことだし。

ベンさんに尋ねたところ、素材の調達は自家栽培するか、近隣の農家に頼るのが普通らしい。トリッドの街近郊ではポーションの素材を育てる農園が多くある。それらの農園は薬師ギルドによってリスト化されていて、街の工房の主たちは、そのリストから条件に合う取引相手を選ぶのだ。

私たちもその仕組みのお陰ですぐに取引相手を見つけることができた。

なんでもトリッドの街のそばで大規模な農園を経営していて、安定して素材を供給できるそうだ。さすがにフヨウの実などの特殊な素材は育てていないものの、癒し草、すずらん草といったポピュラーなものはばっちり揃っていた。

買えないものは地下畑で育てればいいので、これで素材についても解決した。

そんなふうに開店の準備が進む中、ある日見知らぬ商人が私の屋敷を訪ねてきた。

玄関先でにっこりと笑みを浮かべた商人は、こんなことを言った。

「はじめまして、アリシア様。聞くところによりますと、近々ポーション店を開くご予定だとか……」

「その通りですが……それがなにか？」

「私、そんなアリシア様にいいものをお持ちしました。ポーションを入れる瓶なのです

が、ただのガラス瓶ではありません。ぜひ見ていただければと」

「ポーション瓶、ですか」

確かにそれも必要なものだ。せっかく来てもらったことだし、ランドと護衛のルークを伴って、商人を応接室に案内する。ソファに腰かけた商人は、さっそくテーブルに美しい小瓶を置いた。

「これは……確かに普通のポーション瓶とは違いますね。とても綺麗です」

瓶の表面は花弁のような模様に彩られていて、精緻な細工が施された工芸品のようだ。

商人は揉み手をしながら満面の笑みを浮かべた。

「これはシェード領で産出される『花水晶』で作られた瓶です。美しいでしょう？　これにポーションを入れて売れば、飛ぶように売れること間違いなしでございます！」

「しかし普通の瓶よりも高価ではないのですか？　ポーションは消耗品です。値段を上げすぎるようなことはしたくありません」

私が言うと、商人はにやりと口の端を吊り上げる。

「アリシア様はランクⅤのポーションをお作りになれるとか。高ランクのポーションともなれば、やはり見栄えのよさも必要というもの。低ランクのものと明らかに違う見た目にすることで、効能に説得力が生まれます」

「ふむ」

「それに実力のある冒険者は、使うアイテムにもこだわるものです。騙されたと思って、一度試してみませんか？　まとめて買っていただけるのでしたら、半額でお譲りいたしますよ」

流れるように商品を勧めてくる商人。

言っていることが正しいのかはわからないけれど、一理あるようにも感じる。半額で売ってもらえるというなら、試しに買ってみるのも悪くないだろうか？

『『――なし（じゃろ）』』

なんて考えていたら、念話でランドとルークの二人から同時に却下が入った。私は商人に聞こえないよう、念話で尋ね返す。

『なし、ですか？　なぜです？』

『この商人、微妙に心が汚れておる。腹黒といえるほどでもないがの。信用ならん』

これはランドの台詞。

精霊であるランドの相手が善人か見抜く能力は、本当に便利だ。

『ランドはそういう理由ね。なら、なおさらやめとこう。……というか俺、この瓶について知ってるんだよね。ちょっと任せてもらっていい？』

『は、はい』

という念話でのやり取りののち、ルークが商人に向かって口を開いた。

「商人さん、これは花水晶の瓶って言ってましたよね？」

「ええ、その通りです。最近は貴族のみな様が香水なんかを入れる際によく注文を――」

「それ、本当に安全ですか？」

ルークが斬り込むと、一瞬だけ商人が体を揺らした。

「な、なんのことでしょうか？」

「いえね、噂になってるんですよ。近頃王都に暮らす貴族の間で、香水の入れ物として珍しい色の瓶がはやっていて――それを用いた人間が体調を崩してるって」

「それは瓶の中身の問題でしょう」

「貴族の中には、そう思わない人物もいたんですよ。瓶を調べた結果、花水晶には微量ですが人体に害のある物質が含まれているとわかりました」

ルークの言葉に商人の顔色がだんだん悪くなっていく。

「で、その瓶は卸していた業者にすべて返品。この国のどこかには、不良品の花水晶の瓶を大量に抱えたかわいそうな商人がいるそうですね」

「……」

「そんなかわいそうな商人は、きっとどうにかして瓶を処分したいと考えているでしょう。処分するといっても、捨ててしまっては大損です。では、誰に売りつけるか？　貴族が少ない土地の、噂に疎い職人相手なら丁度いいですね。シアン領の調合師なんてまさにぴったりです」

商人の顔色は青を通り越して真っ白になっている。

額からは脂汗がだらだら落ち、視線は落ち着きなくさまようばかり。

「さて商人さん、ここで問題です。騙して瓶を売りつけようとしたことをあなたの名前付きでここら一帯に広めたら、どうなると思いますか？」

「そ、それは……！」

考えるまでもない。商人は信頼が命だ。

健康に害のある商品を売りつけようとしたなんて噂が立ったら、この商人は誰とも取引をしてもらえず破滅するだろう。

「な、なにがお望みですか……」

商人のか細い問いかけにルークはにっこり笑った。

「花水晶の瓶は結構です。しかし普通のポーション瓶は売ってもらいましょう。割引額によってはさっきの話は黙っておいてもいいですよ」

「……わかりました……」

商人は涙目で頷く。……なんだか商人のほうがかわいそうになってきた。

なにが気の毒かって、いつの間にか普通のポーション瓶を安く売ることになっているあたりが特に。

そんなわけで、私たちは通常よりもはるかに安くポーション瓶を仕入れる目途が立ったのだった。

……それにしても、ルークはどこで王都の事情なんて知ったんでしょう？

相変わらず謎の多い人物である。

▽

「やっと調合できます……！」

「嬉しそうじゃのう、アリシア」

工房で笑みを抑えきれずにいる私に、ランドが半ば呆れたように言った。

今までは屋敷の改築だの、素材の確保だのとややこしいことにずっと対応していた。

しかしそれらが終わった今、次の作業は商品作り。

つまり、ポーションの調合だ。

ようやく本業に専念できるのだから、嬉しくないわけがない。

私は工房の機材を使ってどんどん調合を進めていく。

ヒールポーションや魔物除けは多めに作っておくべきだろう。数はたくさん必要だけれど、高ランクのものを作って薄めれば問題ない。

「屋敷に残っていた機材が再利用できて助かりました」

魔力式の粉砕機に癒し草を詰め込みながらしみじみ呟く。

これを使えば、魔石をセットするだけで、素材となる植物を細切れにすることができる。手作業でざくざく切っていた今までとは、作業効率が段違いだ。

「はー……便利じゃのう、これ」

どががががが、とプロペラ状の刃を回転させる粉砕機を眺めてランドが呟いた。

ちなみにルークはこの場にいない。

市場へ食料品、日用品などを買いに出かけているからだ。

もともと護衛として雇ったのだけれど、それだけでは申し訳ないとこうして雑用を引き受けてくれている。

今は開店準備で忙しいので、正直ありがたい。

ペースト状になった癒し草をガラス製の器に入れ、ランドが出してくれた魔力水を注ぐ。あとはスキルを使えば完成だ。

「【調合】！」

魔力を込めて手をかざすと、ガラス越しの魔力水が光を放つ。光が収まると、そこにはきらきらと宝石のように輝く液体が詰まっていた。私は思わずにんまりと口元を緩める。なんの変哲もなかった魔力水がポーションに変化する瞬間は、何度見ても心が躍ってしまう。

さて、次は出来上がったポーションの鑑定だ。

『ヒールポーションⅤ』：回復効果のあるポーション。とても高い効能。

よしよし、きちんとできている。

あとは売る分を取り分け、残りは薄めてランクⅢにするとしよう。

薄めたポーションを瓶に詰め、店に並べるヒールポーションを量産していく。

「ただいまー。アリシア、ちょっといい？」

「はい？」

工房の扉を開けて、ルークが顔を覗かせた。

どうやら買い出しから戻ってきたようだ。

ルークが手招きしているので、調合を中断して工房の外に向かう。

「おかえりなさい、ルーク。なにかあったんですか？」

「アリシアにお客さんだよ。買い出しから戻ってきたら、屋敷の前でうろちょろしてた」

「はあ。お客さんですか」

ルークに連れられて応接室に行く。

するとそこには、画家のような帽子を被った一人の少女が待っていた。

その手にはペンと手帳が握られている。

私を見るなり、少女はぱっと顔を輝かせて――

「おーっ、あんたが噂の『緑髪のポーション売り』？　はじめまして、あたしはメアリー！　冒険者にして凄腕の情報屋やってます！　……というわけで開店直前の取材をしてもいいですか？　いいですね？　やったーありがとうございます！」

「……」

私はまだなにも言ってない。

なんですかこの人、と私は素で思った。

▽

私はテーブルを挟んで目の前の少女と向かい合った。

「それで、ええと、メアリーさんでしたね」

「メアリーでいいよ！」

「……わかりました。それでメアリーはなにをしにここへ？」

「取材だよ！　アリシアはこの街で最近有名な調合師なんでしょ？　そんなあなたが店を開くって聞いて、これはもう直撃取材するしかないなって思って！」

帽子を被った少女、メアリーは明るい声でそんなことを言う。

取材とは変わった用件だ。

というか本当に目の前の少女は冒険者なのだろうか。

彼女の外見を改めて見ると、動きやすそうな軽装に加えて、腰にはナイフを差してい

る。冒険者パーティには偵察役を担う「斥候（スカウト）」という役割があると聞くけれど、そんな感じに見えなくもない。

「それでアリシア、取材を受けてくれるよね？」

きらきらした目を向けられる。

本音を言えば今すぐ調合に戻りたいけれど……せっかく来てくれたことだし、少しくらいなら構わないということにしよう。

「わかりました。それで、取材というのはなにをすればいいんですか？」

「あたしの質問に答えてくれたら大丈夫！　それじゃあまずは――」

メアリーが次々と質問をし、私がそれに答えていく。

もちろん答えられないところはぼかした。

ポーションの製法だとか、【調合】スキルのレベルだとかは秘密だ。

すると、いきなりメアリーが目をきらりと輝（かがや）かせた。

「では次の質問！　……Sランク冒険者のオルグと恋仲だって噂は本当？」

「はい？」

「いやだから、オルグとアリシアが恋人同士だって噂が流れてるんだけど。これって本当？」

まったく身に覚えがない。
だいたい、ポーション作りしか特技のない私に恋人ができるなんて、天地がひっくり返ってもないだろう。そんなことができるなら、領地を追い出されたりしていない。
混乱する私をよそに、メアリーはずいっと身を乗り出してくる。
「オルグってすごい強いし、『世界七大魔剣』の一本を持ってたり史上最年少でSランクになってたりでいろいろと話題性があるんだよね」
世界七大魔剣？　史上最年少でSランク？
なんだか知らない情報がどんどん出てくる。そういえばオルグについて、あまり知らない。ぼんやりとすごい人なんだろうなと思ってはいるけれど。
「けど、今まで浮いた話は全然なくて、だからこそ彼の恋愛ネタは読者のウケが抜群にいいってわけ！　ねえどう？　オルグとはなにかないの？　っていうかなんなら今からでもネタ作ってくれたりしない？」
「え、あ、いえ私はそういうのは」
「そんなこと言わずに！　数字が取れるの！　やっぱゴシップは数字がすべてなの！」
「だ、だいたい今からネタを作ったら嘘じゃないですか！」
「あたし情報って面白ければ嘘でもいいと思うんだよね！」

ものすごい至近距離に迫られてそんなことを言われた。なんてはた迷惑な熱意……！
そんなやり取りをしていると、ひょい、とメアリーの首根っこが掴まれた。
猫のようにメアリーを持ち上げたルークは、にっこりと笑みを浮かべて言う。
「――メアリーさんだっけ。俺の雇い主が怖がってるからそこまでにしてくれるかな？」
……怖い。
ルークはときどきすさまじい威圧感を放つ気がする。
「すすすみませんでした」
すぐに大人しくなってペコペコするメアリー。
ごほん、とメアリーは咳ばらいを一つした。
「そ、それじゃあ……アリシアのお店で販売する中で、『イチオシ！』って感じのポーションはある？」
今度はまともな質問だ。
「そうですね、やはり魔物除けでしょうか。これは私以外では、現在スカーレル商会でしか扱っていないと聞いています。他にも害虫対策用のポーションも用意しています」
「ふむふむ。フォレス大森林で活動するなら虫は困るもんねえ」
「あとは……そうですね。生活に役立つポーションなんかも販売する予定です。消臭

ポーションや、洗浄ポーションなどですね」
そう答えると、メアリーはぽかんとした。
「消臭ポーションに洗浄ポーション？　そ、そんなのがあるの？」
「ええ。そういえば試作品が余っていましたね……よければ使うところを見学しませんか？」
「う、うん！　ぜひ！」
調合をするところを見せるわけではないので、問題はない。
洗浄ポーションで手近にあった汚れた鍋を洗ってみせることにした。
ポーションをかけ、水ですすぐとあら不思議。
焦げ付いていた鍋が新品さながらに輝(かがや)きを取り戻した。
「なななななな」
それを見たメアリーが目を丸くしている。
「こんな感じのポーションなんですが……売れるでしょうか？」
「いや売れるかってそんなの決まりきってると思うんだけどこんなの」
「はい？」
メアリーはがっしと私の肩を掴(つか)んで言った。

「とりあえず、情報屋のメアリーさんからアドバイス。明日の朝イチで洗濯場に行ってどろどろの服にでも使ってみるといいよ。あ、必ず人前でやるんだよ？　誰も見てないところでやっても意味ないからね！」
「は、はあ」
なんだかよくわからないけれど、そのくらいなら試してみてもいいだろう。
そんなやり取りを最後に、謎の冒険者メアリーの取材は終了した。

▽

「とうとうこの日がやってきましたね……！」
「うむ」
「いよいよだねえ」
店の中に私、ランド、ルークの声が響く。
店内の棚にはポーションがずらりと並び、購入されるのを待っている。在庫もたっぷり作った。準備は万全だ。
というわけで、私が店主を務めるポーション店、いよいよオープンである。

店名は「緑の薬師」。

冒険者の間で広まっていた、「緑髪のポーション売り」というあだ名をもとに、三人で相談して決めた。まあ、わかりやすくていいだろう。

……

「……胃が痛くなってきました」

「心配症じゃな」

「そうは言いますけどね、ランド。今日までにどれだけ手間をかけて準備してきたと思ってるんですか。緊張するなというほうが無理です……」

宣伝はきちんとした。

冒険者ギルドに張り紙をしたし、知り合いの冒険者たちにも声をかけた。試供品だって配った。

しかし商売に絶対はない。あのエリカだって、新事業は二割当たればいいほうだと言っていた。

「ポーションというのは大まかな売値が規則で決まっているので、極端に安くしてお客を呼ぶことはできません。冒険者向けの商品の品揃えもギルドとあまり変わりませんし、立地も街の大通りからは少し離れていますし……」

ああ、考えれば考えるほど腰が引けてくる。

もうすぐ開店時間だというのに。

「はいはいシャキッとしてね雇い主さん。ここまできたら逃げても仕方ないでしょ」

「わ、わかりました」

ルークに背中を押されて、私は閉じていた木製の扉に手をかける。

そうだ、私はルークの雇い主にしてこの店の責任者だ。

覚悟を決めよう。

今どれだけ閑古鳥が鳴いたとしても、私はこの店を盛り上げていくんだ！

「い、いらっしゃいませ。ポーション店『緑の薬師』、ただいま開店で――」

「「――ポーションを寄越せぇえええええっ!!」」

「!?」

いきなり大勢の冒険者が押し寄せてきて、私は思わず店内に逃げ込んだ。

しかし扉を閉め損ねたため冒険者たちは当然のように中に入ってくる。

「魔物除けはどこだ！」

「あったぞこっちだ！　買い占めろ！」



「虫除けポーションは一つ残らず俺たちのもんだあああああ！」

ポーション棚に群がり、すさまじい奪い合いを始める冒険者たち。

こ、この展開は予想外です……！

「まあ、やっぱりこうなるよねえ」

ルークは苦笑しながらその光景を眺めている。

「な、なぜルークはそんなに平然としているんですか？」

「いや、だってアリシアの魔物除けって、ギルドに納品したらいつもすぐに売り切れるじゃないか。それに虫除けポーションの試供品もかなり評判よかったし」

「……それ、さっき言ってくれたら無駄に緊張せずに済んだのですが」

「さっきまでのアリシア、俺の話なんて聞こえてなかったじゃないか」

それはまあ、そうかもしれない。

開店前の緊張はかなり大きかったから。

「おい！　これは俺が先に取っただろ⁉」

「知ったことか！　悔しかったら奪い返してみろ！」

「てめえっ……」

お客が集まったのは嬉しいことだけれど、同じ商品目当ての人が多いせいで騒ぎが起こってしまっている。魔物除けを買える数を制限する張り紙をしているけれど、どうやらそれも目に入っていないようだ。

「……仕方ありません、争いを止めてきます」

「ああ、待った。俺が行くよ」

「いいんですか？　では、すみませんがお願いします。荒事は苦手で」

「うん。任せて」

争いを続けている冒険者たちのもとにルークが歩いていく。

そんなルークの手には木剣が握られている。防犯用として、カウンターの内側に用意しておいたものだ。

……ちなみに。

木剣でもルークの持つ【剣術Ⅴ】のスキルは発動する。

「あの、ルーク。一応言いますが、できれば手加減してあげてもらえると」

「あはは、やだなあ。心配いらないよ」

「そ、そうですよね。いくら暴れていても、開店初日のお客にあまり酷いことは――」

「――冒険者はみんな頑丈だからね。多少どついても問題ないよ」

私の求めている答えと違うんですが……

その後数分で場を鎮静化させたルークの指示により、冒険者たちは綺麗に列を作ってポーションを買っていった。

この件から、私の店には凶悪な番犬がいる、という噂が立ってしまったけれど、私は否定することができないのだった。

なにはともあれ、結果は初日から大繁盛である。

このままの勢いが続いてほしいと思う。

▽

冒険者というのは、基本的に朝から夕方にかけて仕事を行う。よって、買い出しが行われるのは朝の出発前か夕方以降であることが多い。昼頃には余裕ができるはずなので、その時間は店番をルークに任せ、私は翌日分の調合をする。

……という算段だったのに。

「調合師！　調合師はいるの⁉」
「わ、私がそうですが」
「この洗浄ポーションって本当にお皿や服の汚れが綺麗に落ちるのかしら？　それでモノが傷んだりとかはしない？　絹や麻や毛皮で違ってくるのかしら？」
「ええと、まず絹については――」
女性客にポーションの詳細について聞かれたので、私が対応する。
さすがにルークも効果の詳細までは理解していないので、私が出ていくしかない。
冒険者たちがはけたあと、次に来店したのは洗浄ポーションや消臭ポーション目当てのお客たちだった。
トリッドの街の主婦や料理人ばかりでなく、なんと隣街に住む貴族に仕えるメイドまで買い付けに来たのだから驚きである。
お客の対応に追われて、昼を過ぎても調合どころじゃない。
数日はもつだろうと思っていたポーションが底を突きそうな勢いだった。
なんとかお客をさばききって、私は思わずテーブルに突っ伏した。
「な、なぜ初日からこんなにお客が……」
繁盛するのはありがたい。けれどここまで忙しいと喜ぶ暇もない。

「例の洗濯場での一件で噂が広まったのかな？」
ルークが言っているのは、メアリーの助言を実行したときのことだろう。街の女性たちが集まって洗濯を行う場所で、泥だらけの服が洗浄ポーションによって綺麗になる光景を見せたのだ。日々洗濯物に苦労する彼女たちにとって、洗浄ポーションは革命的だったらしく、あのときは質問攻めにされて大変だった。
「確かにあれも影響しているとは思いますが……それだけで説明がつくでしょうか」
「うむ。街の外からも客が来ておったからのう。まったく、どこで聞きつけたのやら」
どうも他にも理由がある気がする。
三人で頭を悩ませていると、からんころんと扉のベルが鳴った。私は急いで身体を起こす。
「いらっしゃいませ――って、オルグじゃないですか」
「おう。そろそろ客も落ち着くかと思って様子を見に来たぜ」
そこにいたのは「赤の大鷲」リーダーのオルグだ。今日は冒険者活動が休みなのか、いつも通り大剣を背負っているが鎧は着ていない。そして手には色とりどりの花が咲く鉢植えを持っていた。
「あー、これ、開店祝いだ」

「ありがとうございます！　飾らせてもらいますね」
「……う、嬉しいか？」
「？　はい。嬉しいですよ」
私が言うと、オルグは小声で「……よし、あいつらのアドバイスに従ってよかった……！」と呟いた。なんの話だろうか。
「にしても、景気よく売れてるみたいだな」
「はい。でも、なぜこんなことになったのかわかりません」
「ん？　ああ、そりゃコレのせいだろ」
そう言ってオルグが取り出したのは、数枚の紙の束。
上のほうには、でかでかと「メアリー特報」なるタイトルが躍っている。
「……これは一体」
「お前んとこに、メアリーって変な女が来ただろ。あいつが発行してる……まあ、新聞みてーなもんだ」
メアリーといえば、以前取材に来たあの冒険者の少女だ。
オルグに差し出された「メアリー特報」を読んでみると、私の店についていろいろと書かれていた。なるほど、あの取材はこうして使われたと。

「あいつは文章を紙に複製できるヘンなスキルを持っててな。あちこち飛び回って面白そうなネタを探しては、こうして記事にしてるってわけだ。一応、ファンも結構いるらしい」
「つまり、私の店が初日から多くのお客に恵まれたのはそのお陰だと？」
「まあ、全部じゃないだろうけどな」
個人で発行している新聞で私の店に大勢のお客を呼び込むとは、あのメアリーという少女は思ったよりも影響力のある人物のようだ。
「ちなみに『メアリー特報』の半分はあいつが適当に書いたガセネタだから気をつけろよ」
「ええ……」
影響力があるのなら面白半分で嘘を書かないでほしい。
「あいつの記事はいろんな街にばらまかれるからな。これからしばらく、客が尽きないと思うぜ」
ありがたい話だ。
しかしこの忙しさが明日以降も続くとなるとハードすぎないだろうか。……いや、店を開くと決めたのは私だ。乗るしかない、この追い風に。

さて、とオルグは言った。
「俺はこれから予定入れてないんだよな」
「そうなんですか？　なぜです？」
「そりゃこの店になんかあったら心配で――じゃなくて。た、たまたまな。それで、なにか俺に手伝ってほしいことはないか？」
オルグに手伝ってほしいこと……
「……なんでもいいんですか？」
「ああ！　入手が難しい素材でもいくらでも採ってきてやるよ」
ありがたい申し出だ。なんて優しいんだろうこの人は。
私は素直に一番手伝ってほしいことを告げた。
「では、私と店番を代わってください！　調合をしないと商品の在庫が尽きそうなんです！」
「……」
オルグは頷いてくれたけれど、微妙に釈然としないような表情をしていた気がする。

第二章

「緑の薬師」をオープンしてから数日が経過した。
「きょ、今日も完売……！」
最後のお客を見送った私は、閉めた扉にもたれかかった。
開店以来ずっと繁盛しているのは嬉しいけれど、私の体力がもたない。
ランドがのそのそとこちらに寄ってくる。
「大変じゃのう、店を営むというのは」
「はい、こんなに大変だとは思いませんでした……」
私はしみじみとそう言う。
この忙しさにもいずれ慣れると思いたいところだ。
「お疲れ様、アリシア。あとのことは俺たちに任せて、少し休憩したら？」
金勘定に誤りがないか確認してくれているルークが、私のほうを見て言った。
「いえ、明日の分のポーションを調合しないといけません」
「あまり無理はしないほうがいいと思うけど」
「仕方ありません。商品を切らすわけにはいかないですからね。ふふ、まさかこの私が

少しでも調合を負担に思う日がくるとは……」

私が自嘲すると、ルークが難しい顔で唸る。

「調合は俺も手伝えないしなあ。この際、新しい調合師を雇ったほうがいいんじゃないの？」

「む」

ルークの言葉には一理ある。

現状、この「緑の薬師」では商品の補充が間に合っていない。もともと接客をルークに任せ、私は忙しいときだけ店に出て、残りの時間は調合作業に使うつもりでいた。しかし蓋を開けてみると、私が店に出なくてはいけない時間が想定よりずっと長かった。ポーションについて説明を求める客のなんと多いことか。

とはいえ、その理由もなんとなくわかる。

私が売っているポーションはオリジナルの調合が多いから、買う人間にとっても不安なんだろう。

ルークにポーションについて最低限説明はしてあるとはいえ、深く突っ込んだ質問まではさすがに対応しきれない。そうすると説明のために私が出ていくことになり、結果として私が調合に充てる時間が足りなくなる。

仮にポーションについて細かい質問をされても答えられるような店員がいれば、私も調合に専念でき、店はうまく回ることだろう。

「そうですね。明日にでも薬師ギルドに相談して、うちで働いてくれる調合師を募集してみようと思います」

「うん、それがいいと思うよ」

私はこの店で働いてくれる調合師を探すことにした。

さらに数日後。

「……予想以上に人が集まっているんですが」

私は店の外にいる人たちを見てそう呟いた。

「大量じゃなあ」

「そうだね。二十人くらい来てるんじゃない？」

すぐ近くでは、ランドとルークが呑気にそんなことを言っている。

ルークと相談した翌日、私は薬師ギルドに頼んで調合師を募集してもらった。するとあっという間に応募が殺到したらしく、応募者に店に来てもらって面接をすることにし

た。店を臨時休業しての大仕事である。
「それにしても、この人数は……」
集まった応募者たちを窓から見ながら、ルークが難しい顔をしている。
「ルーク？　どうかしましたか？」
「……いや、なんでもないよ。それよりそろそろ面接の時間だ」
「そうですね。では、始めましょう」
外に並んでいる応募者があまりに多いので、何回かに分けて面接をすることにして、三人を店の中に通す。さあ面接開始だ。
調合用の器具や素材を載せた長机を挟み、応募者たちと向かい合う。
「私がこの『緑の薬師』を経営するアリシアです。今日は来てくださってありがとうございます」
「「よろしくお願いします！」」
挨拶をかわしつつ、ちらりとランドに視線を向ける。
どんな人間を雇うかはまだ決めていないけれど、悪人はアウトだ。ランドの能力でまずはそこをはっきりさせておきたい。
『大丈夫じゃな。悪人と言えるほどの者はおらん』

どうやら問題はなさそうだ。
それでは調合師としての実力を見せてもらおう。
「さっそくですが、調合の腕を見せてもらいます。ここに材料を用意したので、この場でヒールポーションを作ってみてください」
調合師としての実力を測るには、実際にポーションを作ってもらうのが一番だ。下処理の速さや丁寧さだけでなく、【調合】スキルの発動に必要となる魔力の量もおおよそわかる。
応募者たちは予想していたのか、特に戸惑うことなくヒールポーションを作っていく。
十分後、そこには完成した三つのヒールポーションがあった。
見たところどれもランクⅡ程度だけれど、調合の手際自体はかなりよかった。慣れない道具であることを考えれば、十分及第点だ。
彼らならどこの工房でも即戦力になれるだろう。あまりに人数が多かったのでどんな調合師が来たのかと思っていたけれど、これならすぐにでも雇ってしまいたいほどだ。
「どれもいい出来ですね。結果は数日以内に薬師ギルド経由でお伝えします。なにかご質問はありますか？」
質問を募るが、特に手は挙がらない。

それでは解散、と言いかけたところで、今まで黙っていたルークがこんなことを言い出した。

「ごめんアリシア、一ついいかな？　彼らに聞いておきたいことがあるんだ」

「別に構いませんが……なにか気になることでもあるんですか？」

「ちょっとね。さて君たち、質問なんだけど――」

ルークは応募者の三人に尋ねた。

「――君たちはどこの工房に依頼されてきたのかな？」

ルークの唐突な言葉に私はぎょっとした。いきなりなにを言い出すんですか！

私が声を上げようとすると、ルークはそれに先んじて応募者の一人に質問を重ねる。

「じゃあ君に聞こうか。君は本当に自分の意思でここに来たのかい？」

「そ、それはもちろん……」

「本当に？　大丈夫、もしそうでなくても責めたりしないよ」

最初は否定していた応募者だったけれど、ルークの言葉を聞くうちにだんだん視線が泳ぐようになってきた。そしてしばらくして白状した。

「――すみません。実は自分はマルク工房の工房長に言われて来ました」

……え？

「お、俺はリーガル工房からです！」

「私も、調合の師匠に命令されて……」

次々に口を割る応募者たち。

「やっぱりか……さすがに集まった人数が多すぎると思ったんだ」

溜め息を吐くルークに私は思わず尋ねた。

「ど、どういうことですか……？　ルーク、説明してください！」

「簡単に言うと、彼らはスパイだ。君のポーションの調合レシピを盗むために、他の工房がうちに潜入させようとしてきたんだよ」

ルークが言うと、三人の応募者は気まずそうに目を逸らした。

その態度だけでルークの言葉が真実だとわかってしまう。

「俺にはポーションのことはよくわからないけど、アリシアのポーションにはいくつか他の店にはないものがある。それが目当てだろうね。ランドの能力で判別できなかったし、たぶん彼らは上に命令されて仕方なく来てるんじゃないかな」

確信しているように、ルークはそうはっきり告げた。

立ち読みサンプルはここまで